



吉田真美

## 「外国語で多読をするということ」

近ごろ、本学八号館の地下の第五閲覧室で、頻繁に学生が訪れるようになり、電車の中でも本学の学生らしき若者が英語の読み物に夢中になっている姿が見うけられる。「多読文化」が本学に根付き始めているようだ。京都外国語大学では英語を専攻語または第二外国語として選択すると入学後の2年間は、英語の多読学習が課せられることになっている。近年全国の中学、高校、大学だけでなく、小学校にまで、多くの学校で英語教育の一環として多読が取り入れられ、急速に普及してきている。なぜ多読活動に多くの教員や英語学習者が魅せられるのだろうか？多読とはどのような学習活動であり、それによってどのような効果がもたらされるのだろうか？

多読とは文字通りたくさん読むことであるが、「外国語の多読とは、辞書を使わずに比較的やさしい本を読み、細かいことは気にせず全体の内容を把握しながらドンドン読み進めていくこと」<sup>\*1</sup>と定義されている。教室の外に出れば全く英語を用いる機会がなくなる日本人英語学習者にとって外国語習得を成功させるためには、母国語や第二言語の習得（その言語圏で生活しながら対象言語を学ぶ）の環境とは異なり、アウトプット（書く話す）の必然性は皆無に等しく、インプット（聞く読む）の機会も圧倒的に不足している。さらに日本の英語教育の大きな目標である入試に備えるために、大量の文法項目や語彙を文脈と切り離れた形で、知識中心に暗記を強要させる指導が主流となり、多くの日本人学習者は大学まで進学しても、簡単な表現でさえコミュニケーションで使えるレベルにまで達しないことが多い。例えばトイレを借りてよいかという文を作るのにも、「トイレ＝bathroom」、「借りる＝borrow」と単語帳などで単独に覚えさせられており、文法の知識により助動詞を用いた疑問文にして目的語と動詞を組み合わせるというプロセスを経てできあがった“Can I borrow bathroom?”は冠詞

も付け忘れて動詞の選択も誤った文なのである。単語や文法を独立した暗記の対象として教えるのではなく、自然な文脈の流れの中で使用される“May I use a bathroom?”という連語も冠詞も一セットで理解でき、読む本の中で同じパターンに何度も遭遇することで体得することを可能にしてくれるのが多読である。

母国語でも新しい単語を覚えるのに最低10～12回は様々な文脈や表現でその単語に遭遇しなければいけないと言われている<sup>\*2</sup>。そのためには単語と訳のリストや括弧内に適語を埋める文法問題を用いた明示的な学習だけではなく、意味や文の構造を前後の文脈から推測しながら理解していく付随的な学習が必要となる。多読指導に用いられる図書はレベルごとに使用する単語や文法が制限されているため、同じ表現が何度も出てくることになり、結果として付随的学習が起こりえるのである。

多読をすることで、使える語彙や文法が身につくだけでなく、流暢に読めるようになったり、聞きとれる表現が増えたり、話す書く等の産出能力やTOEIC等の英語の試験での得点が向上するなど、多読の効果が数多く報告されている。多読で効果をあげるためには1) 辞書は引かない 2) 分からないところは飛ばす 3) おもしろくなければやめるという三原則がある。易しい英語の本であれば英語で読んでいることを忘れるくらい読書に没頭することができ、それが大量の読書に繋がり、結果として英語での情報処理の効率を上げ、豊かな表現力を身に付けさせるのである。

\*1 高瀬敦子著『英語多読・多聴指導マニュアル』（大修館書店, 2010）

\*2 Coady, J. & Huckin T. (Eds.) “L2 vocabulary acquisition through extensive reading” in “Second language vocabulary acquisition: a rationale for pedagogy” (Cambridge University Press, 1997)